

4月1日(土)2017年

新潟日報

Otona
おとなプラス

稽古の成果を披露する古町芸妓―新潟市中央区

写真は写真部・大須賀悠

華やかに、しなやかに、艶やかに

脈々と受け継がれてきた湊町文化を象徴する新潟市中央区の古町花街は、伝統のもてなしの心を伝える古町芸妓の活動の舞台だ。華やかに、しなやかに、艶やかに―。芸の道を究めようと、日々稽古に励む芸妓の世界の一端に触れた。

かつて芸妓が後継者不足に陥った危機感から発足し、会社組織で育成する「柳都振興」は、今年30年の節目を迎える。

身分は会社員の芸妓が、三業会館(中央区)などで研鑽を積む。和服を着て日本文化を身近に感じながら仕事をしたいと、最近では県外からインターン就職する若い女性も現れた。これまでに約50人が芸妓としてデビューするなど踊り手を輩出してきた一方で、踊りに欠かせない伴奏役「地方」の育成が急がれている。積極的に技術を吸収しようと、三味線や唄、鳴り物(鼓や太鼓)の師匠を東京から招いて学んでいる。3月24日には、その成果を披露する発表会があり、上達ぶりに大きな拍手が送られた。

「芸妓に会いたい、料亭などのお座敷は気後れする」という向きには、舞台公演や祭りなどのイベントがある。行政などの補助でお昼に気軽に楽しめる機会も増えてきた。

磨いた芸や会話で、訪れた人をもてなす芸妓たち。一歩足を踏み出せば、伝統文化を受け継いでいこうとする、粋な心に触れられるはずだ。

(報道部・鈴木啓弘)



柳都振興 1987年12月に発足し、株式会社の社員として芸妓を育成する。当時、芸妓候補を住み込みで抱えて育てる置屋制度のままでは新たな芸妓が生まれず、後継者不足に対応するため地元企業約80社が出資した。

同社によると、芸妓養成の会社は

全国でも初めてで、その後山形県などで同様の組織が発足した。社長の中野進さん(85)は「関西の宝塚歌劇団のような組織を目指そうという思いだった」と振り返る。

寮や保険など福利厚生のほか、産休・育休制度がある。制度を利用した唯一の芸妓が、あやめさん(43)。

3人の子どもの母で「長く続けることに意義がある仕事なので、休んでも復帰できるのはよかった」と語る。

所属する芸妓は1日現在で13人。置屋制度で育ったベテラン芸妓の「お姐さん」は14人で、お座敷やイベントで踊りを披露する際、主に伴奏役で支える。